

卓越大学院プログラム現地視察報告書(令和元年度)

卓越大学院プログラム委員会

機 関 名	北海道大学	整 理 番 号	1 8 0 1
プログラム名 称	One Health フロンティア卓越大学院		
プログラム責任者	長谷川 晃	プログラムコーディネーター	堀内 基広
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本プログラムは、博士課程教育リーディングプログラム「One Health に貢献する獣医学グローバルリーダー育成プログラム」での経験と成果を活用した取組として、学生の受入及び実施・運営体制の構築について概ね当初の構想どおり順調に進行している。 ・全学及び連携先機関である帯広畜産大学・酪農学園大学の学生を対象に、文理融合・異分野連携を目指した One Health Ally Course が設置され、学生の受入を開始している。 ・本プログラムの第一期生に当たる令和元（2019）年度については、One Health Ally Course の学生も含めて志願倍率が低い状態であった。 ・留学生が約半数を占め、日本人学生も多様なバックグラウンドのある学生が参加しており、いずれも意欲的かつ明確な目標を有している。 ・「One Health」を共通目標に多様な人材が組織の壁を超えて協同するプラットフォームの構築に向け、先行組織として「トランスレーショナルリサーチ推進室」が設置されており、将来的には学内共同研究施設の「HU One Health リサーチセンター」へと発展させることが予定されている。 ・北海道大学がこれまで強化してきた国際機関や海外の大学との連携体制も活用されており、One Health Ally Course の collaborative training や on site training として実施する国際機関や海外フィールドでのトレーニングは本プログラムの魅力として学生にも好評である。 ・意見交換に参加した学生は「One Health」のコンセプトを的確に捉えており、エコシステムの重要性についてもよく理解している。また、学生の英語力に応じ少人数にグループ分けした上で集中的に実施するアカデミックイングリッシュや、学生主体の企画による「WISE/LP Seminar」など、本プログラムのカリキュラムに意欲的に取り組んでいることもうかがえる。 ・本プログラムへの学生の満足度は高く、また留学生を含む学生間のコミュニケーションも円滑であることから、アカデミックイングリッシュをはじめとした本プログラムによる教育の成果が表れつつあるように見受けられる。 <p style="text-align: center;">【大学院教育全体の改革への取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本プログラムをはじめとした多様なオーダーメイド型教育プログラムを統括し、大学院全体の改革を図ることを目的とした「大学院改革ステーション」を設置予定であり、本プログラムの取組を全学にフィードバックする体制が担保されることが見込まれる。 ・One Health Ally Course の文理融合や異分野連携に関するアイデアは、令和元（2019）年 7 月に設置された「人間知・脳・AI 研究教育センター」における文学研究院を中心とした人文・社会科学分野のプログラムに取り入れられており、今後、本プログラムの取組が学内に波及することが期待される。 ・One Health Ally Course を大学院改革の試金石とし、分野を問わず学内の全ての博 			

士課程学生に向けた大学院共通教育プログラムであることをうたっているが、現時点では人文・社会科学分野の学生は参加していない。「One Health」の課題には社会学、法学、経済学といった分野からのアプローチも重要であることから、自然科学分野だけでなく社会学、法学、経済学なども含んだ文理融合の領域を俯瞰できる人材育成を目指すとともに、大学院教育全体への波及をより効果的なものとする観点からも、人文・社会科学分野も含め、本プログラムの取組に対する全学的な認知や理解と、獣医学分野以外の学生の積極的な受入れに取り組むことが期待される。

2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）

- 本プログラムの卓越性を担保するために優秀な学生を選抜するという観点からも、獣医学分野以外の学生を One Health Alley Course に受け入れる上で、本プログラムに対する獣医学分野以外の全学教員から十分な理解と認知を得ることが重要であり、学部クラスの各教授会での本プログラムの魅力をアナウンスするなど含めて、一層の努力が求められる。
- One Health Ally Course は4年間にわたり履修する計画であるが、10月から開始されるため、4年制の研究科に4月に入学した学生が参加する場合は、所属研究科の修業年限との半年間のタイムラグが生じ、One Health Ally Course の修了が所属研究科修了後になることも懸念されるため、4月入学の One Health Ally Course も含めた履修上の検討が必要と思われる。
- 4月に入学する学生には、本事業経費、国費外国人留学生、JICA 等により全員が何かしらの経済的支援を受けており、修了するまで最大4年間の受給が可能なシステムとなっている。一方で、One Health Ally Course の学生からは、経済的支援がない状態で所属する研究科と One Health Ally Course の両カリキュラムに参加していることから、学修時間や生活費を確保することも難しいとの意見があった。また、より優秀な学生の獲得を目指し、授業料免除等も含めた経済的支援の制度について再検討が望まれる。
- ケミカルハザード領域は本プログラムの専門家コースの一つであるが、現時点では当該領域の科目を受講した学生が少ない。本プログラムにおいて掲げる人材養成像を踏まえれば、当該領域の学修は重要であると考えられることから、選択必修科目としての位置付けなどの見直しについて検討が望まれる。
- 学生のキャリア形成を継続的にサポートするためにも、定期的な進路希望調査が必要であり、まずは入学後カリキュラムに少し慣れてきた時期に進路希望調査を行う必要があると思われる。また、併せて要望事項等を確認するアンケート調査も行い、必要に応じてメンター等によりサポートをすることも検討していただきたい。
- 現時点での学生の希望進路は教育研究機関が大半を占めており、国際機関等の希望者は著しく限られていたが、UNCTAD や TICAD など人文・社会科学分野の学生にとっても興味のある活躍の場が存在するので、人文・社会科学分野の教員と議論を行うなど特に One Health Ally Course の学生を主軸として国際機関等で活躍できる人材育成への具体的な方向性を示すことが望まれる。
- 人獣共通感染症は社会・経済問題とも大きな関わりを持つことから、人文・社会科学分野の学生が参加する枠組みを活用し、法学や経済学の分野の視点が加わることにより、本プログラムに参加している人獣感染症の課題へ志向をもつ学生への教育効果を更に向上させるような仕組みを検討することも期待される。